

MAPPS story

Series Column

Why do we built this platform?

内田 剛史

早稻田システム開発株式会社
代表取締役

Ep. 22

「博物館力」の
伝達方法

「ポケット学芸員」誕生秘話

…などという大げさなものでもないのですが、I.B.MUSEUM SaaSの機能の一部として開発したスマホアプリには、個人的に大きな思い入れがあります。というわけで、お久しぶりの「MAPPSストーリー」を、ちょっと再開いたします。

「Facebookで紹介していいですか?」

日々、仕事で訪れるミュージアム。時間があれば展示を拝見し、社のFacebookで紹介する——私たちは、そんな活動を3年近く、毎日続けてきました。この活動を通じて改めて実感したのは、「博物館は、学芸員さんに案内していただいた方がずっと面白い」ということです。

でも、実際には不可能な話。稀にそういう機会に恵まれたとしても、すべての来館者に学芸員が付くことは、言うまでもなく無理です。ならば、それに近い感覚を味わってもらうために、何か方法はないだろうか…。

「ポケット学芸員」は、そんな個人的な思いから生まれました。

素朴な疑問と願いから始まった新サービス

「ポケット学芸員」のサービス内容を検討する際にイメージしたのは、「自分専属の学芸員が、胸ポケットに入っているような状態」です。まるで妖精のようですが、いまはまさに、そんな存在が身近にありますよね。そう、スマートフォンです。

スマホ用のアプリなら「展示品についての詳細を耳元で囁いてくれる」シーンを作ることは可能ですし、そんなサービスも実際にあります。でも、違うミュージアムに出かけるたびに、「違う妖精に入れ替える」というのは、とても面倒なのではないか…。そんな素朴な疑問は、社内のディスカッションを通して現実的なプランとなり、開発現場へと落ちていきます。

詳しい機能などについては他の資料に譲りますが、「ポケット学芸員」は、発端となったアイデアも、最終的なアプリの仕様も、とにかくシンプルです。これなら、いつもの打ち合わせの後の鑑賞時に使っても苦にならない。一般のミュージアムファ

ンの皆さんも、子どもからお年寄りまで迷わずお使いいただけるはず。手前みそですが、そんな手応えのようなものを感じています。

「学芸員の力、博物館の力を、絶対に伝えてやる!」

ミュージアムは面白いし、楽しいし、ためになるし。疲れた時には癒しになるし、煮詰まった時にはインスピレーションを刺激してくれる。人生を考えるきっかけになることだってあるし、先人や祖先に感謝する気持ちも新たにできる…。

ともすれば自分のことで手いっぱいになる現代社会で、時空を超えて「他者」を感じられる施設。営業スタッフ1人あたりで、年間100館を軽く超える数のミュージアムを訪問する私たちは、毎日のように思い知らされています。ですが、一般の方々はどうでしょうか。

昨年2月、日本政策投資銀行が発表した「公共施設に関する住民意識調査」には、打ちのめされるようなレポートが載っていました。「今後も公共施設として優先的に残すべきと思う施設はどれか(複数回答可)」という設問で、博物館を「残すべきとしたのは「4人に一人」しかいなかつたというのです。

図書館については、過半数の人が残すべきと回答しています。なのに、博物館は、その存在意義、利用価値すら理解されていないのではないか。

学芸員の皆さんのが有する膨大な知識は、大学の教授にも引けを取らないはず。展示物だけでなく、この「専門知識」をもっと役立ててもらえば、「学芸員の力、博物館の力を知ってもらう」機会にもなるのではないか。いや、絶対になるはずだ。

「ポケット学芸員」には、そんな思いも込めたつもりです。

第11回 平成28年4月29日発行